

氏名	フルカワ 古川 はるな
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第149号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉クロード・ドビュッシーの音楽詩学 ーフルート作品の意味論的考察ー

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	金昌国
(副査)	〃	〃	(〃)	船山隆
(〃)	〃	〃	(〃)	小畑善昭
(〃)	〃	准教授	(〃)	山本正治
(〃)	〃	非常勤講師	(〃)	権 寧

(論文内容の要旨)

本論文は、クロード・ドビュッシーClaude Debussy (1862-1918) のフルート作品における音楽詩学をその用法を通して解明し、彼の作品におけるフルートが持つ意味を考察すること、そのことにより実際の演奏における解釈の可能性を示すことを目的としている。

ドビュッシーの音楽に対して、音楽学者はこれまでにさまざまな美学的アプローチをおこない、その音楽の本質に迫ろうと試みてきた。一方演奏家によるドビュッシーのフルート作品研究は、実際の演奏上の問題を解明する方向に傾いており、現状では作品の内容を深く考察する研究にまで至っていないように見受けられる。本論文は、ドビュッシーのフルート作品を美学的なアプローチにより考察し、その音楽を深く理解しようとする試みである。本論は3章で構成されており、それぞれ異なる3つの方向によるアプローチによって研究を進めるものである。各章の内容は以下の通りである。

第1章では、ドビュッシーの生きた時代である19世紀末の、フランスにおけるフルートの変遷に伴う美学の変動の様相についての考察を行う。ここでは、19世紀のヴィルトゥオーゾ時代からドビュッシーのフルート作品に至るまでの、楽器の改良、演奏法とその美学の変化、フルート作品の変遷、という3つの観点から、当時のフランスにおけるフルートという概念の変化の様相を辿り、ドビュッシーの音楽が生まれる土壌がいかんして培われたのか明らかにするものである。その結果、新しい楽器である「ベーム・フルート」のフランスにおける受容には、楽器製作者と演奏家が大きく寄与したこと、また演奏家がベーム・フルートの演奏法の確立とともに、「ニュアンス」と「息の重要性」という新しい演奏美学を開拓し、パリ音楽院の教則本にその表現方法を組み入れたこと、その美学がドビュッシーの作品において十全に発揮されるに至ったことが明らかとなる。

第2章では、《牧神の午後への前奏曲》を含めたドビュッシーのフルート作品、《ブリティスの歌》のための付随音楽、《シランクス》、フルート、ヴィオラ、ハーブのためのソナタのフルート用法を、管弦楽作品におけるフルートの配置や同時代のフランスの作曲家のフルート用法も含めて考察する。上記の4作品に共通して見られるフルート用法の特徴からその着想の根源を考察し、彼のフルート観を明らかにすることが目的である。ここではドビュッシーがその音楽作品のなかでフルートを非実体的な観念と結びつけていること、また大きな音量は要求せず、ピアノの領域のなかで多様なニュアンスを要求したこと、そしてフルートが「歌う」ことを求めなかったことが観察される。そのことにより、ドビュッシーがフルートに牧神の概念を象徴的に投影したこと、またフルートの音そのものの美しさが存分に発揮

されるよう専心したことが導き出される。

第3章では、前章までに導きだされたことから、ドビュッシーの音楽におけるフルートの意味を考察し、彼がフルートに求めたことを演奏家の立場から考察することを試みる。ここではまず、ドビュッシーのフルート作品に常に密接に関連している「牧神」または「パンの笛」という概念の着想の見直しをはかる。ここから、ドビュッシーにおける牧神像は全体神という極めて根源的、観念的なものであり、フルート作品における牧神とは芸術の神秘の象徴であるという結論が導き出される。続いて、これまでに導き出された結論を踏まえたうえで、ドビュッシーのフルートの意味するものを総括的に考察する。ここから、息の霊的な力を信じた古代の祈りの笛に見られるようなフルートの息遣いを、ドビュッシーがフルートに求めていたことが分かる。その結果、ドビュッシーのフルートが意味するものとは、自然の神秘への信仰であり、自然のなかから生まれた音楽の神秘への信仰であるという結論が導き出された。

(総合審査結果の要旨)

本論文での第1章では、18世紀後半に於けるフランスでの楽器（フルート）の発展とパリ音楽院におけるフレンチ・スクール（フルート界で使われている言葉）の継承についての緻密で詳細な研究を行っている。

18世紀半ば、ミュンヘンのフルート奏者テオバルト・ベームが現在世界中で使われているフルートを発明したが、地元ドイツでは全く採用されず、フランスで最初に使われて来た経緯を詳しく研究している。

さらに、音量を求めず美しい音色だけを求める、フランスのフルート奏法の発展の経緯も詳しく研究した。

以上の部分だけでひとつの論文として完成していると言えるくらいの立派なものであった。

第2章では、ドビュッシーの音楽におけるフルートの用法を、ドビュッシーが作曲した4曲を中心に研究し、ドビュッシーのフルートに対する感覚考えを明らかにしている。この面でもよく研究された論文である。

ただフレンチ・スクール（フランス・フルート奏法）の、ひたすら美しさを求め音量を欲しなかった点が、ドビュッシーのフルート使用法に関連していることは、十分に理解できるが、ベーム式フルートが出現したために、ドビュッシーのフルート音楽が生まれた…と言わんばかりの結論はいささか疑問を呼び起すものである。ベーム式フルートの目的と結果は、おもに音量の増加と音程の正確度であり、小さくて美しい音のためにあるのではないからである。

ドビュッシーの三作品、牧神の午後への前奏曲、シランクス、ソナタを演奏したが、小さくて美しい音だけを使用する昔のフランス奏法で、わずかなニュアンスの変化を加えての大変適切な演奏であった。